
大切な日

北川瑞稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大切な日

【Nコード】

N6090S

【作者名】

北川瑞稀

【あらすじ】

“大切な日とは、必ずしも自分だけのものというわけではないのです。”

◆サイトより2010年新一誕生日小説の再掲載です。新一、誕生日おめでとう!!

「誕生日おめでとう、コナンくん！」

「あ、ありがとう…」

薄暗い部屋の中、蘭がクラッカーを鳴らした。こんなことやるの何年ぶりだろうと思いつながら、ふうーと強く息を吐いてろうそくの火を消した。

今日は工藤新一…もとい、江戸川コナンの誕生日だ。

彼の誕生日はゴールデンウィークの真ん中に位置する。探偵団の仲間たちは田舎の祖父母の家に帰ったりしているため、実際に会って祝ってくれるのは蘭と小五郎しかない。

だが小五郎は、コナンの誕生日など忘れきっていて、朝から麻雀に行ってしまった。この分だと帰るのは夜遅くなるだろう。

つまり、祝ってくれるのは蘭だけになるということだ。

…それはいい。それはいいのだ。が……。

…これは一体、どうすればいいものか…。

コナンの目の前には、机いっぱい並べられたご馳走と、途轍もなく大きなショートケーキがあった。

二人で食べるには、大きすぎるケーキ。

そのケーキの前で、コナンはどうすればいいのか困り果てていた。

甘いものはあまり好きではない。別に嫌いというわけではないのだが。

こんな甘ったるいものを好き好んで食べる男は、あの怪盗ぐらいだろう…と思う。

このケーキが自分の誕生日を祝ってくれているものだとすることはよくわかる。蘭はこれを作るために、昨日の夜から用意していたのだということもよく知っている。自分の誕生日を思い出せたのはそれのおかげだろう。

苺と生クリームがたくさんあったケーキ。装飾はまるでプロが作ったかのように上手い。彼女のことだから味もプロ級だろう。

…だからといって…これは…なあ…。

さっきまでケーキの上で輝いていた、7つのろうそくがなんとも虚しくて仕方がない。

困惑しきったコナンの前に、さらに困惑させるようなものが差し出される。

「はい、コナンくん！」

渡されたのは、子供対象の仮面ヤイバーショーの招待券。

…だから、頼むから子供扱いはやめてくれよ。

そんなことを言えるはずもなく、コナンはひきつった笑いで感謝の言葉を返した。そんなコナンに蘭は気付かず、心底嬉しそうな顔をした。

…ま、こんな顔をしてくれるなら、これも悪くないかもな…。

そう思い蘭の顔をボーッと見つめていると、彼女はすぐにその視

線に気付いた。

「喜んでくれてよかった!」

にっこりと天使の微笑みのような笑顔を振りまきながら、そう言
った。

…こんな顔、他の男には見せたくねえ…。

コナンの姿でそんなことを言えるはずもなく…まあ例え新一の姿
であっても言えるかはわからないのだが…赤い顔を隠すように、手
元の招待券へ目をそらした。

その行動に、彼女は自分があげたものが気に入ってくれたのかと
思い、嬉しくなってつい言ってしまった。本人には口止めされてい
ることを。

「快斗くんがね、これが喜ぶんじゃないかって薦めてくれたのよ。」

その言葉を聞いた途端、コナンの顔から笑顔が消えた。

「このケーキもね、快斗くんが教えてくれたのよ。だいたいの子
供が喜ぶのはこういうのだって。」

…あんのヤロオ…!

笑顔が消えたコナンを、蘭は心配そうな顔で覗き込む。

思わず招待券を握り潰したくなる衝動を抑えて、コナンは笑顔で「へえ、じゃあ快斗兄ちゃんにお礼言っとかなくちゃね!」と言った。

「うん、そうね。じゃあ食べようか!」

「うん!」

蘭の合図で、ご馳走に手を付け始める。彼女の前では笑顔を保ちながら、心の中では快斗への仕返しを企んでいた。

…明日の晚餐は魚料理だ。心して待ってろよ快斗…!

その瞬間、快斗は背筋が凍るような寒気を感じたとか、感じてないとか…。

「あ、いけない!忘れてた!」

突然声を上げたので、びっくりとした。何だろうと思って彼女を見ると、彼女はエプロンのポケットをゴソゴソと探っていた。そして包装紙に包まれたチケットのようなものを取り出した。

「そうそう…これ!」

はい、コナンくん。と、蘭から手渡された物。それは：

「…図書カード？」

図書カード2000円。

封を開けて、見てみたものにはそう書かれていた。

それをじっと見つめて動かないコナンに、蘭はあわてて弁解する。

「あ、えっと…コナンくんってよく本読んでるでしょ？でも私、どんな本がコナンくんの好みがわからないから…」

…別に怒ってたわけじゃないから、そんなに言い訳みたいなことしなくていいんだけど…。

コナンはふっと微笑むと、ありがとうと言った。

彼女の気遣いが、なんとも心地よく感じる。

そんな彼に、彼女はどいたしましてと笑い返す。

そんな自分たちに、彼らは笑った。何故かよくわからないけれど、笑った。

そんな穏やかな雰囲気の中、二人きりのパーティーは、続いていた。

「ただいまー」

声をかけても、返事が返ってこないのはわかっている。今は夜中の2時。子供はとっくに寝る時間だ。起こさないように、小声で言った。

リビングに入った途端目に入ったのは、ソファで肩をもたれかかるようにして眠っている二人。娘と居候の少年だった。

部屋の中を見渡して、何があったのか大方予想はついた。散らかったままの、クラッカーのゴミを屑籠に捨てた。

今日は少年の誕生日だ。それはちゃんと覚えている。

だが麻雀と言って出掛けたのは、何か癪に触ったからだった。

何か：それが何なのかはわからない。わからないものを追い求めるのが探偵だが、探偵にもわからないものはたくさんある。

その“何か”を言葉で表すとしたら：何だろう。“勘”だろうか。

少年がいつか娘の幼馴染みで想い人でもある男と同一人物であることには、随分前に気付いている。そしてその男がいつか娘を奪っていくのだろうということも。

彼に言わないのは、気付いていないふりをしているのは、彼にもいろいろあるのだろうと思っているからだ。

彼は自分と同じ探偵だ。一つの謎に突き進み、その謎を解き明かすのが仕事。

———そう。迷宮、なんて言葉は有り得ない。
謎を最後まで解き明かすのが探偵。

「…しん…いち…」

声のしたほうへ振り向くと、娘の閉じた瞳から涙がこぼれ落ちるのが見えた。

この先の未来で、娘と結婚すると言っても、簡単にしてやらないことはすでに心の中で決めている。

そう簡単に認めたりはしてやらない。誰が何を言おうとも。

これは娘を泣かせている罰だ。

大事な大事な愛娘を、傷付ける輩は許さない。

だけど、今日だけ…いや、もう昨日になってしまったけれど。この日だけは、認める認めないも敵味方関係ない。

「…誕生日おめでとう、新一」

——この日だけは、誕生日だけは。

親から愛情をもらって、生まれてきた大切な日なのだから。

(後書き)

2010年新一誕生日小説の再掲載です。
新一、誕生日おめでとう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6090s/>

大切な日

2011年10月6日08時10分発行